

「すべてのこどもにこども時間を」 ～クリニックラウンの役割

日本クリニックラウン協会事務局長兼アーティスティックディレクター

臨床道化師 塚原 成幸



赤い鼻の道化師たちが病棟中を闊歩する・・・と聞いたら、その日は特別なイベントが院内で開催されると大半の方が考えると思います。あるいは1998年に製作された映画 *PATCH ADAMS* を思い浮かべる方もいるでしょう。ところが、これが小児病棟の日常的な光景だとしたら、皆さんは容易にそのことを受け入れることができますか。そのことを歓迎する？あるいは歓迎できない？皆さんの意見はいかがでしょう。

今回私は、病棟の空気を優しさの気持ちで包み、闘病生活を送る子どもの療育環境改善を目指して活動している、クリニックラウン（臨床道化師）の活動を紹介させていただきます。

クリニックラウンは、病院を意味する「クリニック」と道化師をさす「クラウン」を合わせた造語で、日本語に訳す時は「臨床道化師」と呼ばれます。簡単に説明すると、入院生活を送る子どもの病室を定期的に訪問し、遊びやユーモアを届け、子どもが笑顔になれる環境を創造する道化師、それがクリニックラウンです。



クリニックラウンは、優れた表現者であると同時に、子どもとの接し方、子どもの心理、保健衛生や病院の規則に精通した発達援助のスペシャリストです。病気の治療のために様々な制限の中で入院生活をしている子どもたちが、おもいきり笑い、主体的に遊ぶことができる人間関係やリラックスできる空間をつくることを目指して、小児医療施設を定期的に訪問しています。

日本クリニックラウン協会では、入院している子どもが笑顔になれる環境づくりのために、子どもの成長・発達に欠かせない三つの要素の充実を目指しています。

<子どもの成長・発達に欠かせない3要素>

イマジネーション

- ・想像力を刺激する……………「遊び」
- ・能動性を育む……………「出会いと発見」
- ・家族や友達、学校など…「社会的環境」

子どもは家族や地域、学校の友だちなど、他者との関わりのなかで様々な体験や発見をし、その関係性を深めることでいきいきとした生活を送ります。しかし、入院生活が長くなると、子どもの成長に不可欠な出会いや遊ぶ時間が制限されてしまいます。治療が最優先になる闘病生活のなかでは、必然的に子どもが子どもらしい時間を過ごすことが難しくなるのです。

そこでクリニックラウンは、遊びという共通言語を駆使して、相互コミュニケーションを行い、子どもたちに「わ～、すごい！」という新鮮な驚きを届けます。そして、遊びのなかから「これなに？」「やってみたい！」という気持ちを引き起こし、子どもの想像力を育みます。また、「こんなことをクリニックラウンにしてみよう」といった子どもの自発性を促し、「今度会ったときはこうしよう」という子ども自身の能動性を引き出します。また、治療とは異なる視点で子どもに対する理解を深め、子どもの自己の育ちを支えることがクリニックラウンの役割です。



クリニクラウンにとって大切なのは、子どもの気持ちを理解し、誰かと関わろうとする能動性を引き出すことです。それを可能にするのが、定期的な訪問による相互の信頼です。現在、クリニクラウンは月に2回、あるいは月に1回のペースで約束された病院を訪問しています。「また来たよ!」「じゃあ、またね…」その期待感と安心感が、心の安らぐ関係性を促すこととなります。定期的な関わりができるからこそ、また会いたいと思う期待感を育てることができ、同時に1回の接触で全てのことをやり切ろうと焦らずに関わることができます。クリニクラウンに会っている時間だけが充実するのではなく、人と関わるコミュニケーションそのものに関心を持ってもらえるような発想と演出がクリニクラウン特有のアプローチと言えます。

クリニクラウンが目指す最大の効果は、子どもが人に対して興味を持ち、自分自身を心から愛する気持ちを持ってもらうことにあります。なぜなら闘病生活を送る子どものなかには、慢性的な痛みや持続する恐怖感や不安感によって、自己嫌悪に陥ってしまう場合が多いからです。また、自己に対する関心の低下はやがて他者理解の閉塞感に発展し、やがて自分の将来の展望が描きにくい発育課題をつくり出すこととなります。この問題は、困難な状況にある子どもの生きることにに対するモチベーションの低下を引き起こします。クリニクラウンは子どもが本来もっている生きる力を高めることが重要です。

また、クリニクラウンは病棟で入院している子どもだけではなく、医療スタッフや付き添いのご家族、事務職員、清掃スタッフなど、病棟にいる全ての人びとも関わります。これは病院内の環境を構成している要素が病棟にある設備や医療機器だけでなく、そこにいる人間の存在が子どもに大きく影響しているという考えに基づいています。クリニクラウンは、さまざまな人との関わりを通じて、病棟内の人間関係や固定化した価値観をかき混ぜ、その場の風通しを良くしていきます。クリニクラウンがいろいろな場面で、さまざまな立場の人と関わることにより、「自然と笑顔になっている自分に気づいた」(看護師)、クリニクラウンと踊るドクターを見て、「先生の違う一面が垣間見えた」(保護者)など、本来その人自身が持っている自然な感情や病院内でや

りとりする機会を創出しています。

このことは、常に緊張状態にある入院中の子どもに、心のゆとりと安定をもたらします。また、他者との関係性が取りにくいと思い込まれていた子どもがクリニクラウンと無邪気に遊んでいる様子を周りの大人が目撃し、あらためてその子が兼ね備えている豊かな子どもらしい表情を再認識するということにもつながっていきます。

人はそれぞれ多様な性格や表情を持っているものであり、意外な一面が見えることで、その人への見方も変わっていきます。相手に対しての見方が変わると、関わりにも変化が生じるということは、多くの方が経験した記憶があると思います。つまり、相手に対する意識の変化によってその場の空気が和らぎ、寛容な雰囲気を持つ空間に変わっていく効果があるのです。クリニクラウンの訪問は病棟という空間にいる人間関係を円滑にし、人と人がつながり合うきっかけを演出し、療育環境の改善を行う取り組みです。

クリニクラウンの訪問が2005年にスタートして今年で5年が経過しようとしています。現在では訪問する病院も病棟も増えてきました。また、医療スタッフと毎回交わすカンファレンスも、単に「子どもが笑った、楽しかった」といった訪問時における感想の共有だけでなく、クリニクラウンと子どもがふれあうことによる具体的な効果(対人恐怖がなくなった、医療スタッフとのコミュニケーションが円滑になったなど)に関心が注がれるようになってきました。

このことは、入院している子どもの気分転換や遊び役の補完といった役目から、クリニクラウンが小児病棟における療育環境向上に参画し、医療者と保護者、そして闘病中の子どものストレス軽減に貢献するというクリニクラウンの役目に対する大幅な意識の転換を意味しています。しかし、まだまだ定期訪問が実現していない地域が存在しているのも事実です。そして、高度な専門性を身につけた人材の育成、組織基盤の整備などの課題も山積しています。今後は更に多くの方の支援と理解を呼びかけ、闘病生活を送る子どもの「こども時間」の充実を呼びかけていきたいと思っています。